

第八回

市民写真コンテスト

10月15日締め切りです

お早めに応募を

市では、第八回市民写真コンテストを今月十五日まで開催、その作品を募集中です。

今回から留萌市観光協会とタイアップし、作品も、みなさんが応募しやすいよう、観光、産業開発芸術、市民生活と各部門にわけま

／応募先

留萌市幸町一丁目

留萌市役所内 企画広報室

(郵送もしくは直接お届けください。)

／募集の期間 十月十五日まで
／賞 市長賞の他、各部門賞、入選などの賞、選外の方全員に参加賞をさしあげます。

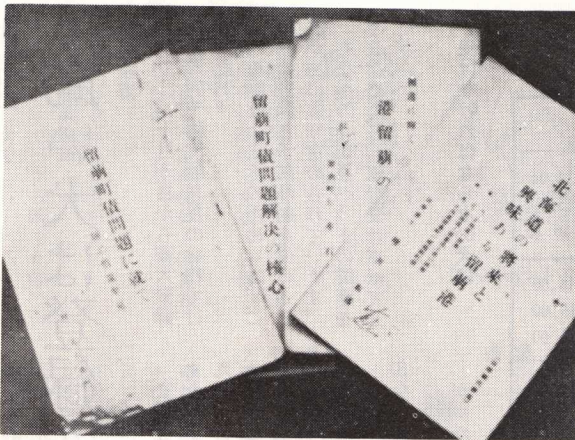
また、観光協会からも、該当作品には特別賞が贈られます。

第8回留萌市民写真コンテスト応募票

画題	観光・産業開発・市民生活・芸術 (応募部門に○印で囲んでください)		
部門	男	職	
住所	女	才	業
氏名			
カメラ	露出F	秒	
レンズ	フィルム		
フィルター			

留萌市史………(20)

町債のおこり



昭和八年七月発行の「留萌大観」の寄稿文の中に町民阿部真蔵の「大正十三年ころの思い出話」が載せられている。

「大留萌建設」の中で、町が全国に類例のない二百四十九万円の借金で、三年このかたやっていた町営土木事業も本月いっぱい完成するとかこれは大留萌の形が出来るので同慶に堪えない。

副港は満々とした水が深い、船が入るなら何時でも入ってこいと築港の完成を待っている。町としては誠に準備がよい。

その上年来の望みであった中学校は設けられる。

上水道は敷設すべく鉄管だけは買つて山と積まれている。

羽幌線は盛んに工事を行っている。

それにまた財界の巨頭、浅野総一郎翁が突然留萌町に来られて、棚からぼた餅式の談をして行く。

これら並べられた諸問題が何の故障もなく実現されれば決して幻にならないが、今やこの諸問題一つ一つ大難関に達している。

町債約二百五十万円は来年、十四年三月末に元利金共に返さなければならぬ。

町の生死を握る築港は、政府の緊縮方針によって、まさに工事操延の運命にならんとしている。

留萌は今や重大時機に直面してあたかも暗礁に乗りあげた船の様なものだ。

理事者やその他の人々も封建時代の様な従来やり方をやめて門戸を解放し、一般町民を篤と了解出来る様としどし公表して、快く全町民一丸となるべく努力された。

この文によると、大正十三年ごろの留萌は、次々と工事が完成し進捗をみて将来の夢が大きく、輝かしい希望の時代であるが、一方断崖に立たされた恐怖と不安、そして焦燥の真只中にもあった。

大正十年六月の大留萌建設に要する町債は、普通一般の町債と比し、その内容は著しく違った性格のものであった。

すなわち河川引替後に生ずる廃

川地帯を整理し、交換分合を行ない、これを償還財源に充当して町民の負担にせず、また自治体の一般会計、一般町債と切り離して考えられた。

明治二十年代より画策された港湾修築が中心となつて、さらに鉄道留萌線が敷設されることが確定したのは明治四十年であった。

この二大事業の助成と港湾都市建設の目的は港湾の能率を高め、留萌の町をこれにマッチさせるため、いかに物心両面の発展を促進させるかにあつた。

これに要する経費として新たに二百五十万円におよぶ起債を要することになった。

この町債をさすものに(1)港湾修築(2)鉄道留萌線の敷設(3)留萌鉄道棧橋会社の創設(4)大留萌建設諸工事のうち四項、すなわち大留萌建設工事に要する経費の町債をさす。